新聞が紡ぐモノガタリ~厚藤四郎の記憶~

令和2年6月7日 セキレイ@WagtailW

《プロローグ》

厚藤四郎が審神者に呼び出され執務室に入ると、審神者と近侍の山姥切国広がいた。いつもの出陣要請とは何か違う張り詰めた空気に気圧されないよう、厚は背筋を伸ばした。

「厚藤四郎、あなたの歴史が改変されていることがわかりました。歴史の改変点を見極めて、あなたの歴史を取り戻してください。」

Introduction

厚藤四郎は「享保名物帳」にも記載された「名物刀剣」である。「享保名物帳」によると、黒田官兵衛が所持したとも言われ、「刀剣乱舞」の二次創作においては「黒田組」に括られていることも多い。室町から江戸時代の厚藤四郎の来歴はここでは省略するが、名物帳には当時の所有者として御物＝将軍家と記載されている。現在厚藤四郎は国宝として東京国立博物館にあることは周知のことだが、東博の前身である帝室博物館に納められた昭和13年以前の所有者に関しては誤伝のほうが広く知られており、厚藤四郎が田安徳川家から帝博に納められたという正しい歴史は、広く認識されてはいないのではないだろうか。

本稿は、昨年7月にセキレイが発表したレポートの焼き直しとなっている。今後更に調査をすすめ、厚藤四郎がいつ徳川宗家から田安家に来たのかを考察したり、他の田安家の刀剣に関して考察したりの内容を来年1月に発行予定の刀剣プレゼン&アンソロジー『御刀萬語』第二弾に寄稿予定となっている。

Just before Tokyo Imperial Museum

東京国立博物館の前身である帝室博物館が6年の歳月をかけて建設された復興本館（現在の本館）は昭和12年（1937）11月に竣工し、翌13年11月10日、天皇陛下の行幸を仰いで開館した[2]。このお披露目の展覧会で、「帝博の厚藤四郎」はデビューとなる。この時の目録に厚藤四郎は「帝室博物館蔵」として掲載されている[3]。しかし、そこには帝室博物館におさめられた経緯や前の所有者の情報は載っていない。

現在広く厚藤四郎の帝博前の所有者として認識されているのは「元徳川御三卿[1]である一橋家」、もしくは、「元徳川御三卿である一橋家か田安家」であろう。

結論から先に言うと、帝室博物館に来る前の厚藤四郎は「田安徳川家」である。「一橋家から帝博に来た」というのは全くの誤りである。しかし、近年多くの刀剣書に、それも刀剣の大家が「厚藤四郎は一橋家にあった」と書いてしまっていることに起因して、一橋家にあったと広く思われてしまっている。（少しググってみるとネット上では帝博前を「一橋家」としているか、「一橋家または田安家」としているのがほとんどで「田安家」と断定しているケースはほとんどない。）

Articles in the newspapers

なぜ「一橋↓帝博」は誤りだと断定できるのか？　の証明として、厚藤四郎が田安家にあったことを示すリアルタイム情報としての新聞記事が少なくとも二つあげられる。一つは明治22年11月の遊就館展示に徳川達孝伯爵（田安徳川）より厚藤四郎が出陳されているという記事と、昭和13年5月に厚藤四郎が帝室博物館に

[1] 徳川御三卿とは、江戸時代中期に徳川氏の一族から分立した大名家。邸のあった場所から、田安家、一橋家、清水家と呼ばれているが氏は徳川である。

納められた記事に徳川達孝より献納とそのものずばり書かれている記事がある（後者は全文掲載する）。

まず、明治22年11月に靖国神社境内の遊就館に展示されていたことは読売新聞や日本新聞で確認できる[4] [5]。（但し、日本新聞は『原藤四郎』と誤字っている。）当時遊就館では春と秋の靖国神社の大祭にあわせて、明治天皇所有の刀剣や著名な刀剣を展示しており、この年の秋の大祭で伯爵徳川達孝より厚藤四郎は出陳されている。またこの時の展示には、子爵小笠原長育より鶯丸が出陳されている。（鶯丸の小笠原家時代として最後の記録。）

昭和13年5月12日の読売新聞には厚藤四郎が5月10日に、徳川達孝伯爵（田安徳川）より帝室博物館に献納されたと書かれている[7]。どうせならば徳川宗家から田安家にきた経緯を書いておいてほしかったものだ。他資料によると、当初田安家より本阿弥光遜を通じて三井家に売却を持ちかけたが断られ帝博に二万円で売却とある[6]。

上野博物館へ　粟田口の短刀　徳川達孝伯から献納

昭和の大典を奉祝して完成された上野の大博物館では今秋開館を前に陳列品の充実をはかるため各方面から考古資料、古美術品の蒐集につとめているが、元侍従長徳川達孝伯は将軍家に代々秘蔵され去る三月国宝に指定された鎌倉中期の名作粟田口吉光作の短刀一口を十日宮内省を経て同館に納めた。この一口は五万円と評価される逸品、長さ七寸二分、厚さ四分で厚味の多いところから厚藤四郎と呼ばれ享保名物帳に記され当時金五百枚代付となっている。はじめ室町幕府の秘蔵品だったがその後摂泉の町人が所持しそれを本阿弥光徳が百貫で求め伊達家[2]に贈って黒田如水、豊臣秀次を経て豊臣秀吉に献じ更に甲斐守から家綱将軍に献上した由緒ある名作で作者吉光は相州正宗と並んで刀匠の大関[3]といわれ短刀を最も得意とし正宗、郷義弘とともに当時の三作ともいわれる。

この記事には厚藤四郎が「去る三月国宝に指定された」と書かれているが、厚藤四郎は戦前の旧国宝には指定されたという記録はない。しかしながら、旧国宝指定のリストに入ったものの、正式な公布前の5月に帝室博物館に収まったため、当時宮内省管轄の帝博所蔵品は国宝の対象とならないため、登録にいたらなかったのではないかと私は推測している。

昭和13年3月1、2日に細川護立会長のもと国宝審査が行われていたことは翌日の新聞記事になっており確かなことである[8]。このとき、刀剣は18件が選ばれたことが記事には書かれている。詳細な内訳は紙面には明かされていないが、各新聞独自に著名なものを挙げているので（佐竹家伝来の三十六歌仙図や一休宗純肖像、地方新聞ではその地方在住者の物件が挙げられている）、新聞記者は内訳リストを持っていたのかもしれない。東京日日新聞は刀剣について触れており、「特に慶喜公の差料であった国光の短刀が目を引く」と書いている。国宝の正式な登録はこの審査会の後日と考えられ、この国宝審査会において認定された物件が公布されたのは、審査会から四カ月後、厚藤四郎が帝室博物館に納まった二カ月後の同年7月4日の官報である[9]。この官報では刀剣は一件少ない17件の登録となっている。この欠けた一件がもしかしたら厚藤四郎なのではないかと私は推測しているが、それを裏付ける確証は得られていない。

2 伊達家にあったのは鎬藤四郎。

3 現在、傑出したものに対し○○の横綱と表現されているが、昔は○○の大関と表現されていた。上から二番目の意味ではない。明治末まで地位としては大関が最高位で横綱は大関の中から指名される名誉称号のようなものだった。

《出陣の儀》

「厚藤四郎の歴史改変は昭和三十三年と思われます。すでに歴史は変えられていますが、なんとかして正しい歴史を取り戻してください。それでは、出陣部隊を発表します。」

審神者は巻物を広げ最初の一振の名を読み上げた。

「太刀 鶯丸」

「ああ、俺は田安時代の厚と会っているからな。お前も行くだろ？大包平。」

「あたり前だ！」

「鶯丸が指名しちゃったよ・・まあ、いいや。次、太刀一期一振。」

「弟の歴史を守るのも、兄の務めですな。」

「太刀 大般若長光。」

「厚藤四郎とは帝博からのよしみだ。[4]」

「それから、打刀 山姥切国広。」

「期待には応えるさ。」

「最後に、今回は第一部隊隊長を短刀 厚藤四郎にお願いします。」

厚藤四郎は大きく息をすって、ゆっくりと吐き出した。

「まかせとけ！　大将！」

厚藤四郎以下五振は、厚藤四郎の歴史を取り戻すため過去へ跳ぶ。

---

[4] 大般若長光は昭和16年11月28日付けで「御料に帰属せり」と官報に記載されている[10]。戦前の頃、帝室博物館は宮内省の管轄であったためこのような表現をされている。令和2年6月現在の刀剣乱舞実装刀で戦前に帝室博物館に納められたのは、厚藤四郎と大般若長光の二振のみ。

Records and memories

明治や昭和の新聞記事から厚藤四郎が田安徳川家にあったことは確実となったが、一橋家旧蔵であるとの認識が広まった経緯を考察してみる。厚藤四郎が田安家蔵であったことは特に秘密の情報であったわけではなく、昭和40年以前は元田安家であるとする資料も多い[11][13][6]。全ての記録を掘り起こせているわけではないが、特に注目すべきは昭和33年の銘刀押形：御物東博において「一橋家から帝博へ」と書かれていることだろう[12]。

帝室博物館以前の厚藤四郎の所蔵に言及している資料

厚藤四郎の来歴 明治以降	田安徳川家説	一橋徳川家説	
M22.11.6 日本新聞他	遊就館展示に関して 出陳徳川達孝		田安家時代のリアルタイムの情報
S13.5.12 読売夕刊	帝室博物館に5月10日 徳川達孝より献納		
S14.2 刀剣会誌452	小倉惣右衛門著 帝博展示感想最近まで田安家に伝来		
S33. 銘刀押形： 御物東博		**佐藤貫一**, 沼田鎌次 編 将軍家に伝来、一橋家に入ったが、昭和の初めに帝博で買い上げ	歴史改変の干渉ポイント
S37 日本名刀物語	**佐藤貫一** 田安から帝室博物館へ		正史の染みだし
S39.1 刀剣と歴史417	小野光敬 田安家にあったのを本阿弥光遜が斡旋して2万で帝博へ		
S48. 日本刀鑑定法		本阿弥光博 一橋家から帝室博物館へ	歴史改変成功
H6.11 日本刀大百科事典		福永酔剣	
H9.7 皇室将軍家大名家刀剣目録		福永酔剣 維新後一橋家に移っていた	
H9.12 週刊朝日百科		小笠原信夫	

これは所蔵元の正式な目録ともいえる書籍で、以降「一橋家」とする記録が多くなり[14][15][16][17]、おそらくこれが歴史改変ポイントと思われる。しかも後日この押形と同じ筆者で東博の刀剣室長であった佐藤貫一氏が「田安家」と正しく書いている[13]。

一橋とはっきり書いてあるということは、田安家に来る前に一橋にあったのではないか？　と思われるかもしれないが、そうであるならば「一橋家に伝来、その後田安家から帝博へ」と書かれなければならないが、押形では田安には一切触れず「一橋家から帝博へ」と書かれたことは単純な誤記である証左であろう。更に、一橋から田安へと併記されている書籍は見当たらない。しかしながら、徳川宗家から田安家に入った記録がないため「一橋家になかったことの完全な証明」は非常に難しいのである。

厚藤四郎は帝博前は田安家だったことは確実である。また一橋家にあった可能性は限りなくゼロに近いと言える。だが、刀剣書に書かれ広まってしまったことはなかなか覆すことができない。（影響力のない末端調査沼人なので。）厚藤四郎が田安家にあった年月は黒田家に在った年月よりも長く、田安家が売却先として最終的に帝室博物館を選んでくれたことで今我々が比較的容易に目にする機会が与えられているのかもしれない。せめてこれを読んだ方々の中だけでも、厚藤四郎の田安の記憶を取り戻してほしい。

参考文献

[1] セキレイ、『厚藤四郎に関して』、2019年7月。http://wagtail.chagasi.com/atsushi.html

[2] 東京国立博物館web site<<東博について>>館の歴史。

[3] 東京帝室博物館復興開館陳列目録.第6、東京帝室博物館、昭和13。

[4] 読売新聞明治22年11月25、26日別刷。

[5] 日本新聞明治22年11月。

[6] 小野光研、『名刀の砥当り』、刀剣と歴史417号、日本刀剣保存会、昭和43。

[7] 読売新聞昭和13年5月12日夕刊。

[8] 読売・東京朝日・東京日日新聞等、昭和13年3月3日。

[9] 官報 昭和13年7月4日。

[10] 官報 昭和17年1月17日。

[11] 小倉惣右衛門、『帝国博物館陳列の刀剣に就き』、刀剣会誌452号、昭和14。

[12] 佐藤貫一、沼田鎌次編、銘刀押形:御物東博、日本美術刀剣保存協会、昭和33。

[13] 佐藤寒山（貫一）、日本名刀物語、白凰社、昭和37。

[14] 本阿弥光博、日本刀鑑定法、雄山閣出版、昭和48。

[15] 福永酔剣、『厚藤四郎』、日本刀大百科事典、平成6。

[16] 福永酔剣、皇室将軍家大名家刀剣目録、平成9。

[17] 小笠原信夫、週刊朝日百科45、平成9。

[18] 室津鯨太郎、刀剣雑話、南人社、大正14。

エピローグ

任務より帰還した厚藤四郎は審神者に報告をした。

「・・・・・・というわけで、昭和中頃から平成での改変の記録は残っちまってるけど、令和の時代には俺が田安家にいたって情報がじわじわと拡散していくはずだ。」

「ひとまずは様子を見ましょう。でも、きっと大丈夫。」

「大将、田安にあった俺の歴史ことを取り戻せたこと、礼を言わせてくれ。」

「礼は山姥切国広に。彼が最初に歴史改変に気づいたの。」

「そっか、ありがとうな！」

山姥切国広は照れ隠しにすこしはにかむ。

「兄弟が教えてくれたんだ。」

審神者が山伏国広や堀川国広の顔を頭に浮かべる横で、厚藤四郎はなつかしい顔を思い出し鋼の瞳を細め破顔した。

「そうか。あんたの布袋国広に礼を言っておいてくれ。」[5]

---

[5] 天正十八年生まれの山姥切国広の同い年の兄弟である布袋国広は大正の頃には田安徳川家蔵であった[18]。この布袋国広は現在足利市民財団所有で、2017年春の足利市美術館において山姥切国広が展示された際、共に出陳。